

IV 検討結果

本章では、1 でプログラムの対象者について、2 でプログラムの考え方・特徴・運営のポイントについて、4 で地域の社会資源について、検討委員会での多角的な検討を踏まえて整理した。また、3 の評価では(1)講座最終日の受講者アンケート、(2)講座修了半年後の修了者アンケート(追跡調査)、(3)講座講師・支援者による意見交換会の3点を素材として結果を考察した。

1 プログラムの対象者

(1) 年齢・配偶関係・就労状況ほか

本プログラムは、原則として15歳から39歳のシングルで無業の女性を対象とする。一定期間、決まった時間に同じ場所で行う講座等に通って来られることを条件とする。

(2) 対象者の特徴

学校、職場、家庭等で生活上のさまざまな困難を経験してきており、心身の健康状態が十分でなく、人間関係を苦手としている人が多いという特徴がある。主体的に生き方を自己選択していくためには、職業に直結するスキル習得以前に、安心感や自己肯定感の回復・獲得、社会生活上の基本的スキルを身につけること、人とのかかわり方の練習をすることなどを必要としている。これらの事柄は、地域若者サポートステーションの対象者の特徴と重なり合う。

しかし、女性の場合、当事者自身も家族など周囲も、独立して自立して社会で生きていくイメージを明確に描きにくい。若い女性が無業のまま生家にとどまっても、「家事手伝い」としてみなされ、問題が可視化されないという特徴がある。

また、女性は、ケア役割、いわゆる「母性的」役割をとるか、性的アピールを武器にするか以外に、社会で他者と関わって生きていくあり方が描きにくい。そのどちらにも当てはまらないと感じる女性、ステレオタイプに違和感を持つ女性は、社会に安心して居られる場所、自分の力を発揮できる場所を得にくい。

これらの対象者の特徴を踏まえて、女性限定のプログラムを実施する必要がある。

(3) 正規雇用での就労経験の有無による対象者の2つのタイプ

本プログラム受講者のプロフィールの分析から、正規雇用での就労経験の有無によって、2つのタイプに分けられる。

①タイプ1：就労経験がない、あるいは非正規の就労経験のみ

学校生活において、あるいは学校を離れて社会に出る段階でなんらかの「つまずき」

があったのではないかと推測され、以後、不安定な状況にある。非正規就労の内容としては、数ヶ月から数年の期間の、アルバイト、派遣を複数経験している。20代以下の人、高等教育機関を卒業していない人に多くみられる。

②タイプ2：正規就労の経験がある

過酷な労働条件、激務で消耗、パワーハラスメント、会社都合、うつ病などなんらかの原因により、正規就労から無職あるいは非正規就労へ移行している。本プログラムの申込書には参加動機として「働く→ひきこもるのループから抜け出せない」といった記述もあり、厳しい状況から抜け出すことが困難なことがうかがえる。30代の人、高等教育機関を卒業している人に多くみられる。

上記の2つのタイプからは、働く女性の二極化する状況がうかがえる。非正規雇用者は増加しており、正規雇用は減少している。非正規雇用者が置かれている不安定な状況と、正規雇用の労働現場での労働強化の影響である。

タイプ1の受講者には、時間を守る、欠席の場合には連絡する、あいさつするといった社会生活上の基本的スキルを学習する必要がある者も見受けられる。タイプ2の受講者は、一定程度の社会生活上の基本的スキルは身につけている人が多い。この点は2つのタイプによって異なる。

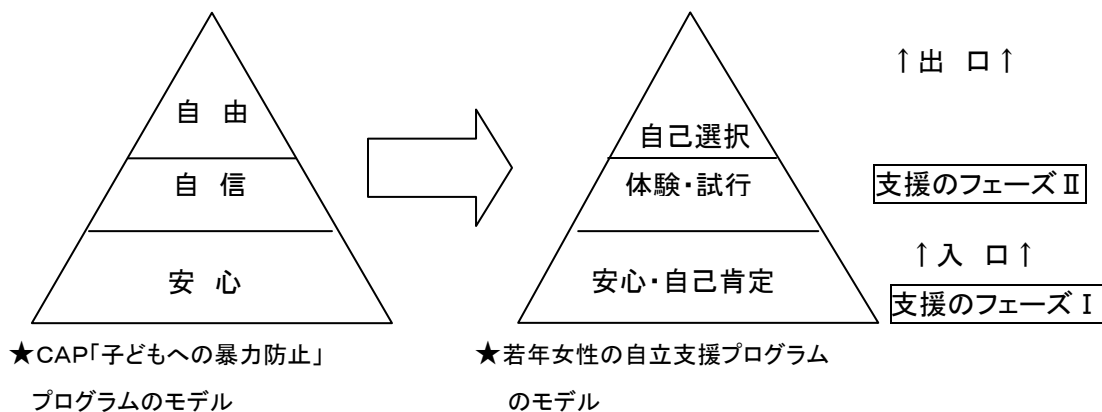
ただし、何らかの挫折を経験してきているという点は、両方のタイプに共通している。支援のフェーズⅠの段階では、両者に同じプログラムを提供することが可能である。支援のフェーズⅡの段階でも同じ枠組みで対応できるが、フェーズⅠからフェーズⅡへの移行の場面や、フェーズⅡでの体験の場では、個別に適切な助言や働きかけが必要となる。(次ページ参照)

2 プログラムの考え方・特徴・運営のポイント

(1) CAPモデルからの展開

まず本プログラムの考え方であるが、支援のフェーズⅠ、フェーズⅡを経て、出口に至るというプロセスを想定している（図表 9）。このモデルは、CAPの「子どもへの暴力防止」プログラムのモデルをもとにした展開型である。このようなプロセスを想定する理由としては、本プログラムの対象者はさまざまな傷つき体験をしてきている人が少なくないことがあげられる。主体的に人生を選択していく前提として、フェーズⅠを安心感や自己肯定感の獲得のための支援、フェーズⅡを安全な環境のなかでの就労体験や試行による自己肯定感の強化と選択肢の増加のための支援と位置づけている。

図表9：支援プログラムのモデル



(2) 支援の入口としての講座、身体性とグループ・ダイナミクス

本プログラムでは、フェーズⅠにおいて講座を支援の入口としている。

フェーズⅠの目的は、①安心感を体験すること、②自己肯定感につながる気づきを得ること、③孤立からの脱出である。ここでは、心理的な安全感を確保するために、意識への働きかけからではなく、身体性やスキルの面から入り、行動化を促進している。自分だけで考えていて空回りするのではなく、行動を変えることによって意識が変わるからである。そのために、あえて相談ではなく、講座を入口とする。

「身体の手当をする」ことは困難を抱えた女性当事者たちが援助者にまずしてもらいたいことの筆頭にあげる、ということは当事者研究でも明らかになっている（上岡陽江＋大嶋栄子、2010、『その後の不自由』医学書院、40-41p）。そこではこれまで身体のケアをされた経験が少ない女性が多いことが理由としてあがっている。この講座では心身の緊張が強い受講者が多いため、こわばりを「ほぐす」こと、力を抜くこと、身体的にスキルをつかんでいくことを促進している。

また、講座という形態をとることにより、グループ・ダイナミクスのメリットが得られると考えている。「グループ・ダイナミクス」はグループのメンバー間で起こる、励

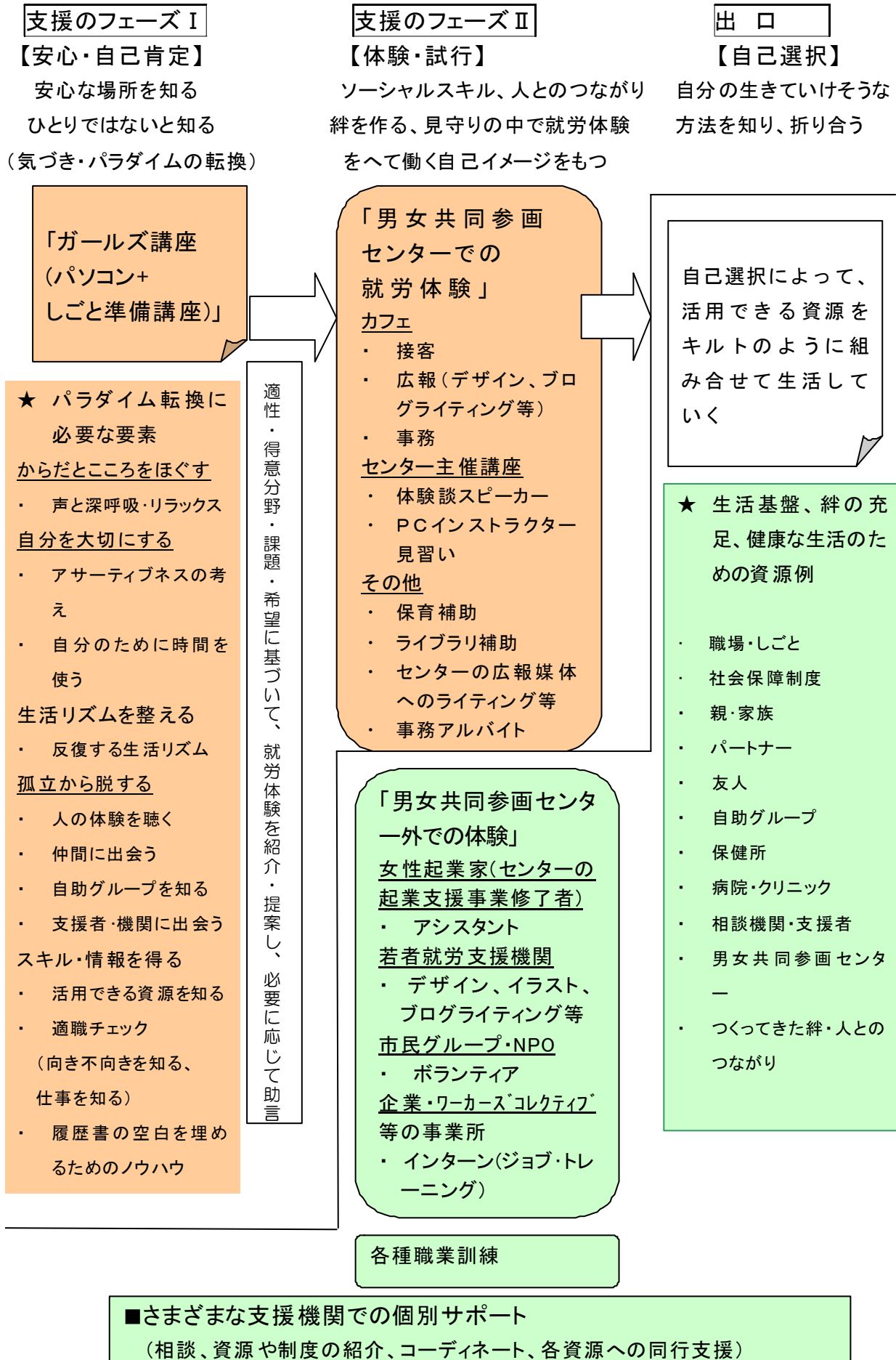
まし、葛藤など様々な相互作用や動きである。ほかのメンバーとかかわることで人の役に立つ経験や対人スキルの練習ができる、自分の状況を相対化できる。さらにグループの中で「ありのままの自分でいい」という安心感を感じられたときに、他のメンバーの存在に触発されて自分の経験について語り始めたり、自分が抑え込んでいた感情に気づいたりする受講者は少なくない。

(3) 体験・試行の重要性

支援のフェーズⅡでは、守られた環境のなかでの就労および社会体験の場を提供する。「時間や約束を守る」「声をかけあう」など社会生活に必要な基本的なソーシャルスキルを実習し、働く場で人と関わること、人とのつながりをつくることを体験する。それらは就労へ向けて一歩を踏み出す自信と動機を強化するからである。

一定期間の体験を経た後、自己の就労イメージをもてるようになることをねらいとしている。

図表 10 : 支援のフェーズと出口 (仕上がり像)

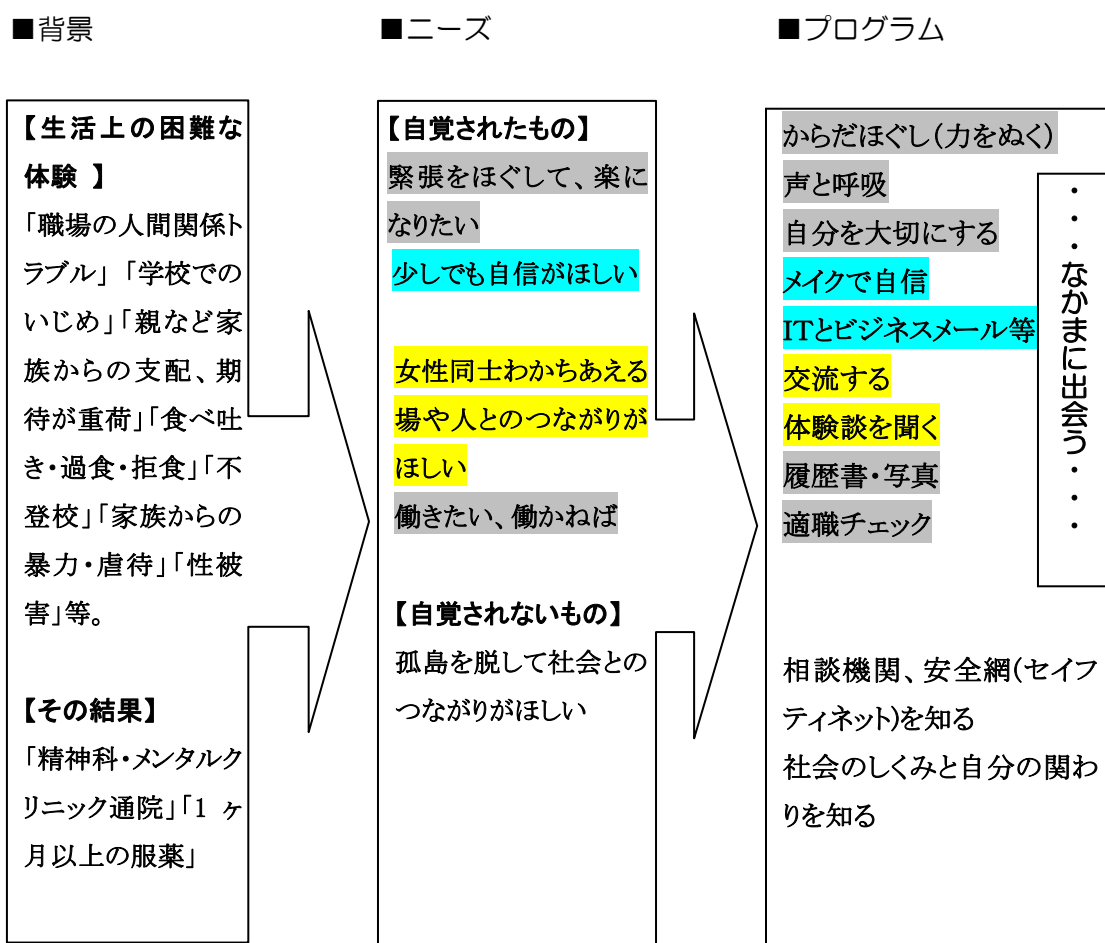


(4) 個人のプロセスとプログラムの枠組み

本プログラムは、対象者への個別サポートではなく、講座と就労体験という枠組みがその内容であることに特徴がある。

個々人のプロセスは、必ずしも入口から出口へ直線的に進むとは限らず、シグザグあるいはラセン状に進んでいくことが考えられる。そのプロセスに寄り添うパーソナル・サポート型のプログラムではなく、個々人のプロセスを促進する装置として、フェーズⅠおよびフェーズⅡを用意するという考え方をとっている。

図表 11：講座プログラムの特徴



(5) 運営のポイント

ここでは講座を運営する際に重要なポイントであるファシリテーター（進行役）がすることとしないことについて整理し、以下にまとめてみた。

《ファシリテーターがすること・しないこと》

しないこと	<ul style="list-style-type: none">① 自己開示や言語化を強要しない 相談の場ではないことを場に関わる者（スタッフも参加者も）の共通理解とし、自分のペースと安全を守ることを優先してもらう② 個人の置かれている状況や考え方、行動等についてファシリテーターが自分の価値観で評価したり批判したりしない
すること	<ul style="list-style-type: none">① 安全のためのルールの文書による呈示とくりかえしの確認 「この場で聞いた個人のことはここにおいて帰る」「話したいことだけを話し、話したくないことは話さない・話さなくてよい」「人のいうことに批判はしない、そのまま受けとめる」 守られない場合は介入すること② むりをせず、自分の体調にあわせて休憩をとり、講座中の部屋の出入りをしてもよいとアナウンス③ 自分自身やものごとの悪い面・できないことではなく、よい面・できること・プラスのことに焦点をあて、意識するよう促進 →個々人のよい面を支持する④ あきらめずになんでもやってみること、行動してみることを推奨・促進（その結果うまくいかなくても失うものはないこと）⑤ 互いに肯定しあう安全な場としての「グループ」を構築

(6) ファシリテーターのあり方と求められるスキル

前項と関連して、ファシリテーターのあり方についてふれておきたい。

他県の男女共同参画センターでの試行実施例では、ファシリテーターである職員が母親のようにケアをしすぎ、受講者から依存されてしまうということが起こり、このような関係性は受講者が本来持っている力を引き出す方向に作用しないのではないかと考え、研修を行ったという事例が報告されている。

安全な場が機能するように講座を下支えし、その後のフォローも含めて一定期間を伴走するのがファシリテーターである。この役割を担当する者がどのようなスタンスで、また求められるスキルをもって受講者と接するかは重要である。

言語化するのは難しいが、スタンスとしては「先生」でも「母」でもない、あえてい

例えば「悩みながらも少し先行くお姉さん」（年齢とはかかわりなく）とでもいうべき立ち位置が適切かと思われる。

これまで実施してきた経験から、ファシリテーターには次のような資質やスキルが求められている。

- 話しやすく、開放的で、自己開示できる
- 相手の考える（自分とは違う）枠組みで把握するよう努力できる
- 自分のくせや短所も理解し、誠実に対応できる
- 自分のまちがいや知らないことを認めることができる
- 評価的な言動や先回りの助言・指導をしない
- 参加者一人ひとりのよいところを見つけ、伝えられる
- プロセスへの介入を理解し、必要なときに介入できる
- 参加者の本来もつ力を信頼し、尊重できる(抱えずに放つ)
- 障がい者就労支援を含む地域資源をよく知り、多様な連携先と関係を構築できる
- その上で、自分の組織で担うべき仕事の範囲と限界を知っている

ファシリテーター自身がこれらに留意しつつ、運営上起こってくる一つひとつのことに対処してスキルアップし、向上しようとするのがよりよい支援につながる。また、問題を一人で抱えずに、組織内のチームで相談し合える態勢は不可欠である。

<参考文献>

中野民夫，2001，「ファシリテーターの条件」『ワークショップ』岩波新書，147-148p

(7) 組織の取組姿勢と地域連携について

さらに、ファシリテーター個人の資質やスキルにゆだねず、組織として事業の必要性についての共通理解に基づいたバックアップと取り組み姿勢をもっていることが重要である。それなくして、これまでにはなかった本プログラムのような支援を男女共同参画センターで実施していくことは難しい。とはいえ、組織内にそのような認識は最初から備わっているものではない。少しずつ具体的な成果を積み上げていくなかで共通理解の基盤をつくっていくことが必要であろう。

それと同時に、男女共同参画センターで担うべき（担える）仕事の範囲と限界を知っていることも重要である。障がい者就労支援を含む地域資源をよく知り、連携先となるさまざまな支援機関・支援者との関係を構築しながら、地域の社会資源の中に適切に男女共同参画センターを位置づけていくことが不可欠であろう。

3 プログラムの評価

(1) 受講者評価

① 方法

第1期から第4期までの講座最終日に実施したアンケートに基づいてまとめた。各回のアンケート設問が完全には同じでないため、比較可能な設問と自由記述について分析した。アンケート実施状況は、表1の通りである。

図表 12 参加者数と回収数

単位：人

	講座参加者数	アンケート回収数
第1期	20	14
第2期	24	18
第3期	22	16
第4期	20	18
合計	86	66
*アンケート回収率：76.7%		

② 講座全体の「役立ち度」

講座全体の「役立ち度」についての評価はとても高かった。「大変役立った」が72.4%、「役立った」が25.8%となっており、全員が肯定的な評価をしている。

図表 13 講座の役立ち度

単位：人

	第1期	第2期	第3期	第4期	合計	割合
大変役立った	9	13	13	14	49	74.2%
役立った	5	5	3	4	17	25.8%
どちらともいえない	0	0	0	0	0	0.0%
あまり役立たなかった	0	0	0	0	0	0.0%
役立たなかった	0	0	0	0	0	0.0%
合計	14	18	16	18	66	100.0%

③ パソコン講座についての評価

ア 肯定的な評価

自由記述の中で、パソコン講座について 27 人から 32 件の肯定的なコメントがあった。参加者のニーズに合ったプログラムだったといえる。コメント内容は「講師の対応について」「取り上げた項目、スキルについて」「講座のレベルについて」「苦手意識の克服」「学習内容の活用について」「その他」の 6 項目に整理できる。以下は、コメントの多かった順に、その内容とポイントである。

第 1 位：講師の対応が高評価

もっとも多かったのは「講師の対応について」の肯定的なコメントで 11 件となっており、「ていねい」な、「わかりやすい」指導が評価されている。「やさしい」「親近感」「支えてくれた」などの自由記述中の文言から、パソコンスキル指導以外の心理的サポートがなされており、受講者はそうしたサポートを求めていることがわかる。

第 2 位：取り上げた項目、スキルが適切との評価

2 番目に多かったのは「取り上げた項目、スキルについて」で 8 件だった。「ワード・エクセルを習いたい」「基礎的な操作を身につけたい」といった、あらかじめ受講者が意識していたニーズに応える内容だったことに加えて、「知らなかったテクニック」「ファンクションキーの使い方」等、自習では身につけにくいスキルを学べたことが評価されている。

第 3 位：基礎からのレベルについて評価

3 番目に多かったのは、「講座のレベルについて」で 4 件だった。4 件とも基礎レベルであったことがよかったという内容だった。

第 4 位：苦手意識の克服への評価

パソコンに対する苦手意識がなくなって自信につながったとのコメントが 3 件あった。スキル習得が自信の回復につながっていることがうかがえる。

第 5 位：学習内容の活用への評価

「役立った」「有意義だった」「将来につながる」という 3 件のコメントからは、学んだスキルを使っていこうと意識がうかがえる。

その他

「無料だったこと」が助かったとするコメントが 2 件、講師にすぐ質問できる環境だったことがよかったとするコメントが 1 件あった。

図表 14 肯定的なコメントの内容

単位：件

	件数
講師の対応について	11
<ul style="list-style-type: none"> ・ ていねい：4 ・ わかりやすい：2 ・ やさしい：1 ・ 親近感：1 ・ 支えてくれた：1 ・ 座る位置まで覚えていてくれた：1 ・ 無駄のない教え方：1 	
取り上げた項目、スキルについて	8
<ul style="list-style-type: none"> ・ ワード・エクセルを習えた：3 ・ 知らなかったテクニックを身につけられた：1 ・ 基礎的な操作やワンポイントを身につけられた：1 ・ ファンクションキーの使い方等を学べた：1 ・ メールの記事を学べた：1 ・ 内容が充実していた：1 	
講座のレベルについて	4
<ul style="list-style-type: none"> ・ 基礎から学べた：4 	
苦手意識の克服	3
<ul style="list-style-type: none"> ・ 自信がもてた：2 ・ 苦手意識が克服できた：1 	
学習内容の活用について	3
<ul style="list-style-type: none"> ・ 役立った：1 ・ 有意義だった：1 ・ 将来につながる：1 	
その他	3
<ul style="list-style-type: none"> ・ 無料でよかった：2 ・ 質問できる環境だった：1 	
合 計	32

イ パソコン講座についての要望・意見

肯定的なコメントが32件あったことと比較すると、要望・意見は6件のみで少なかった。

要望・意見の内容は以下のとおりである。

さらにスキルアップできる講習内容への希望については、横浜市男女共同参画センター3館で実施している「女性のためのパソコン講座」の受講を案内し

ている。また、教え方に関するコメントについては講師にフィードバックしており、今後の改善につなげたい。

図表 15 要望・意見の内容

単位：件

	件数
取り上げる内容、スキル、レベルに関するもの	5
<ul style="list-style-type: none"> ・ウィンドウズライブのIDがその場で全員取れなかったのは残念 ・パワーポイント（を習いたい） ・ワードで名刺づくり（を習いたい） ・中級講座をやってほしい ・復習する時間がもう少しあったほうがよい 	
教え方に関するもの	1
<ul style="list-style-type: none"> ・講師の声が少し聞き取りにくかったり、進め方のスピードが速かった 	
合 計	6

④ しごと準備講座についての評価

ア 肯定的な評価

図表 13 は、しごと準備講座についての肯定的なコメントをまとめた結果である。コメントは 77 件と大変多く、その内容は多岐にわたったが、12 項目に分けて整理した。以下、コメントが多かった順にその内容とポイントを記す。

第 3 位と第 5 位がそれぞれ複数あるのは、コメントが同数だったためである。

第 1 位：知識・情報を得られたことへの評価

もっとも多かったのは、「知識や情報を得られたことがよかった」とする声で、14 件だった。「法律知識を得られてよかった」とするコメントが 9 件、「相談・支援機関の情報を得られたことがよかった」とするコメントが 5 件だった。労働者としての権利を守る根拠となる法律や、困ったときに相談できる機関、サポート機関の情報など、実生活に活かせる知識や情報が得られた点が評価されている。

第 2 位：具体的なスキル習得への評価

「自分を好きになるメイク」と「履歴書の書き方」の人气が高かった。

メイク講習は、ザ・ボディショップの協力を得て同社の社員がボランティアとして関わってくれているプログラムである。「楽しかった」「仕事に就く上で

役立つと思った」といった声のほか、「モデルでもないのにこんなにいろいろしてもらえたことをありがたく感じた」というコメントもあり、人にケアしてもらえることを嬉しいと感じている様子もうかがえる。

「履歴書・職務経歴書の書き方」は、就職活動で必ず必要になることから、役立ったと評価している受講者が多かった。

第3位：からだと心をほぐすプログラムへの評価

整体体操や発声練習といった、身体に働きかけるプログラムがよかったとする声が多かった。「体調管理に役立ちそう」「体をきたえて、内面も元気になるとわかった」といった声が寄せられており、就労や自立に向けての心構えといった意識面への働きかけではなく、身体性を重視した企画意図が効を奏している。

第3位：グループであることに関わる評価

同じ立場の仲間と出会えたことがよかったとするコメントが6件あった。そのほか、「人と関わることの楽しさを思い出した」「人ってさほどこわくないと思えるようになった」「何気ない会話ができるようになった」などのコメントから、人と接することの練習の機会となったことがうかがえる。

第5位：アサーティブネスのプログラムについての評価

「自分を大切にしていいたいということを知った」というコメントが3件あった。このプログラムは第2期から入れており、深い気づきがあった、ライブラリで関連の本を借りて読みふけたなどと感想を書く受講者が少なくない。第1期から入れていればコメントはもっと多数になったことと推測される。

第5位：講師・担当者についての評価

「講師・担当者が明るいのがよかった」「いいところを見つけてくれた」「親切だった」「女性講師のみなのがよかった」など。

第5位：自己理解の深まりについての評価

「自分自身に目を向けられた」「ゆっくり考える時間が持てた」「自分にできることをやっ払いこうと思えた」「感情や心に目を向けてみようと思えた」など。

その他：体験談・安心感・視点の転換・生活リズムの向上等への評価

「当事者の体験談が役立った」「安心感を得られた」「視点や行動を転換できた」「生活リズムを整えるために役立った」「講座の進め方がよかった(出入り自由・体験学習型・ルールがあること)」に関するコメントが各3~4件ずつ寄せられた。

図表 16 肯定的コメント

単位：件

	件数
知識・情報を得られたことについて	14
・ 自分に関わりあることとして労働関係の法律知識を得られた：9 ・ 相談・支援機関についての情報を得られた：5	
具体的スキル習得のプログラムについて	12
・ 「自分を好きになるメイク」がよかった：7 ・ 「履歴書・職務経歴書の書き方」が役立った：5	
身体と心をほぐすプログラムについて	10
・ 「からだほぐし、こころほぐし」（整体体操）がよかった：4 ・ 「発声練習」がよかった：4 ・ その他：2	
グループであることについて	10
・ 仲間と出会えた：6 ・ 人と関わることに積極的になれた：2 ・ その他：2	
アサーティブネスのプログラムについて	5
・ 自分のことを大切にすること、大切にしていいるということを知った：3 ・ その他：2	
講師・担当者について	5
・ （講師・担当者が）明るいのがよかった：2 ・ （参加者の）いいところを見つけてくれた：1 ・ 親切だった：1 ・ 女性講師のみだったのがよかった：1	
自己理解について	5
・ 自分自身に目を向けられた：1 ・ 自分のことを知るなど、精神面を落ち着かせてくれた：1 ・ ゆっくり考える時間が持てた：1 ・ 自分にできることを無理なくやっっていこうと思えた：1 ・ 感情や心に目を向けてみようと思えた：1	
当事者の体験談について	4
・ 就職体験談がよかった：1 ・ 体験談はふだん聞けない話なのでよかった：1 ・ ものづくりや創作活動をしている人の話が聞けてよかった：1 ・ 1期生の体験談が直接聞けてよかった：1	
安心感について	3

<ul style="list-style-type: none"> ・全体的に安心感が得られた：1 ・否定せずに受け入れられた感じがした：1 ・講師が心のいたみに共感してくれた：1 	
視点や行動の転換について	3
<ul style="list-style-type: none"> ・前向きになれた：1 ・思い込みが解けた：1 ・いろいろな角度からの見方があることを知った：1 	
生活リズムの向上について	3
<ul style="list-style-type: none"> ・規則正しく生活するリズムが作れた：1 ・昼間起きられるようになった：1 ・「やること」があることで、必要以上に悩むストレスが軽減した：1 	
講座の進め方がよかった	3
<ul style="list-style-type: none"> ・出入り自由にしてくれたことがありがたかった：1 ・体験学習型だったことがよかった：1 ・ルールがあったこと、マイペースに進めていけたことがよかった：1 	
合 計	77

イ しごと準備講座で取り上げてほしい内容

しごと準備講座で取り上げてほしい内容についてたずねたところ、複数から要望があったのは、「マナー講座」「メンタル面のダメージからの回復についてのプログラム」「食事、栄養など生活改善のプログラム、料理講座など」の3つだった。

図表 17 プログラムで取り上げてほしい内容

単位：件

	件数
マナー講座	3
メンタル面のダメージからの回復についてのプログラム	2
食事、栄養など生活改善のプログラム、料理講座など	2
コミュニケーション	1
面接の練習	1
体から心にアプローチするプログラム(からだほぐしがよかったので)	1
メンバー同士が交流できるプログラム	1
電話対応の練習	1
席の決め方をくじ引きにする	1
合 計	13

(2) 追跡調査結果

① 方法

講座修了半年後に、調査票（A4判3ページ、原票は巻末資料95ページに掲載）をその期の修了者全員に切手貼付の返信用封筒を同封して郵送し、無記名での返送をお願いしている。

これまでに、第1期から第3期の修了者について追跡調査を実施した（ただし、ライフプランニング支援総合推進事業として行ったのは第3期であることからその部分を網掛けとした）。回収状況は表1の通りである。以下、検討を加えてみた。

図表 18 回収状況

単位：人

	第1期生	第2期生	第3期生	計
受講者	20	24	22	66
回答者数	12	10	16	38
回収率	63%	36%	73%	平均58%

② 講座修了後の就労等の状況について

講座修了後の就労等の状況は、以下の通りである。

複数回答があるため、合計数は回答数と一致しない。

図表 19 就労等の状況

単位：人

	第1期生	第2期生	第3期生	計	備考
就労者	8	5	12	25	回答者の66%
職業訓練 通学者	1	1	1	3	簿記、PCほか
市民活動等参 加者	1	1		2	
通所等	1		1	2	作業所・デイケア等
その他	2	6	3	11	「就職活動中」「通院中」
記入なし	1	0	0	1	

次に「就労者」25人の書いた記述を働き方によって分類し、多い順に集計した。

図表20 就労者数の内訳

単位：人

アルバイト	15	
週に5日	6	「保育」「軽作業」「郵便局事務」「コーヒー箱詰め」「事務」
週に3-4日	4	「事務」2、「販売」「デザイナー助手」
週に1日	5	「めぐカフェスタッフ」4、「事務」
パート	1	「公共施設で事務・清掃」
フリー	5	「月に2時間、画像編集作業」「不定期、PCインストラクター」「イベントで手作り作品販売」「週3日、在宅ワークでの事務」「不定期、ゲームシナリオ作り」
派遣	3	「週5日、販売職」「週5日、製造業」
正社員	1	
合計	25	

③ 就労状況についてのまとめ

第3期修了者で就労者が多かったのは、講座修了後、就労体験カフェの準備期間に重なったために、体験的な研修を多く行ったことが影響しているのではないかと考えられる。

就労した25人のうちもっとも多い働き方はアルバイトで、15人に上っている。勤務日数は週に1日・3日・5日がそれぞれ同数程度となっている。アルバイトで、コーヒーの箱詰め作業を1日4時間で週5日行っているという回答もあった。働く時間はそれぞれ、さまざまである。アルバイトの業務内容は、事務・接客販売が多いが、保育、デザイナー助手、ゲームシナリオライターなどという記述もある。

1人だけ正社員となったのはハローワークで支援を受け、ジョブトレーニングを経て障がい者の雇用枠（週20時間）で採用されたケースであった。

就労はしていないがボランティア活動に参加して人に慣れるようにしているという回答もあった。就労した人の自由記述での回答には、就労に至るまでに「市民活動に参加した」という回答が複数あったことから、金銭的な対価が得られなくても社会とのつながり、人とのかわりを練習するのに市民活動・ボランティアへの参加は有効であることがわかる。

④ 講座から現在までの変化について

次の図表の項目ごとに選択項目とした。Yesの多い順に並べると次の通りである。回答数合計はのべ人数である。

※Yesの回答→選択回答の「Aあてはまる」+「Bだいたいあてはまる」

※Noの回答→「Cあまりあてはまらない」+「Dあてはまらない」

図表 21 あてはまる変化

単位：人

項目/回答	Yes	No
【1位】（同数が2項目）		
□講座修了後の情報提供やつながりが継続して役に立った	31	7
□就労意欲が増した	31	7
【2位】		
□色々な経験をもつ人、状況にある人と接して、ものの見方や考え方が変わった	29	9
【3位】（同数が4項目）		
□心の支えになる仲間ができた	28	10
□スキルが身につき、自信がついた	28	10
□色々な相談場所を知ってよかった、相談した	28	10
□今後の自分のイメージがわき、一步踏み出せた	28	10
【4位】		
□朝起きられるなど、体調がよくなった	25	13
【5位】		
□対人関係が以前よりラクになった	24	14
【6位】		
□仕事に就けた	17	21

⑤ 講座修了後の変化についての結果まとめ

結果をみると、「講座修了後の情報提供やつながりが役に立った」と「就労意欲が増した」が同数で「Yes」が最多であった。しごと（就労）準備のモチベーションが高まっており、「しごと準備講座」の目的が達成されていることがうかがえる。自由記述に述べられたその理由を合わせてみると、モチベーションアップには講座だけでは十分ではなく「修了後の情報提供やつながり」が役立っているということがわかる。

次には「ものの見方・考え方が変わった」「仲間が心の支えになった」「スキルが身につき自信がついた」「色々な相談場所を知ってよかった」「今後のイメージがわき、一步踏み出せた」。これらは回答者中ほぼ4人に3人が「Yes」と答えている。特に「仲間が心の支えになった」のは「Yes」の中身として「だいたいあてはまる」ではなく「あてはまる」という明解な回答を最多の20人がしていることが特徴的で

あった。

その次に「朝起きられるなど、体調がよくなった」と「対人関係が以前よりラクになった」の2項目、これは全体で3人に2人が「Yes」の回答となっている。講座修了時には「昼夜逆転がなおってよかった」という声が多いが、その後はまた元に戻ってしまう人もいると思われる。「体調」や「対人関係」の問題は背景が深く、これらの改善には長い時間がかかることが推測される。

「仕事に就けた」という項目への回答は、他の設問とは明らかに異なる結果となった。「Yes」は17人、「No」が21人と「No」の回答のほうが多くなっている。しかし、調査票を細かく見てみると、「No」と答えた人のうち10人は現在就労している。講座受講前にもときどき行っていたアルバイトを継続しているなど、現在の仕事が講座に通った成果とは思っていないということかもしれない。あるいはアルバイトや派遣で働いている状態を「仕事に就けた」とは認識しておらず、正社員でなければ「仕事に就けた」ことにならない、と考えて「No」を選択しているという可能性もある。

◎ 変化についての自由記述・期ごとのまとめ

自由記述をみると、修了の期ごとに「変化があった」内容に特徴が出ているように見受けられる。

1期生は、主催者が初めてこの講座を行ったときに自力で情報をつかみ、集まったメンバーである。「仲間が支えになった」という項目で「Yes」の回答が12人中9人と、「Yes」ではこの項目が最多であったのが特徴である。

- ・同じ問題を持つ仲間とつながることができて大変よかった。
- ・私は発達障がいという生きづらさを抱えているが、同じではなくても生きづらさは共通。今まで問題について話せる仲間がいなかった。孤独感をわかちあえた。
- ・最初はPCスキルがほしかったけれど、仲間がいると通うのが楽しみになった。
- ・(まだ)相談はしていないが、さまざまなNPOなどのサポートがあること(を知ることができたこと)が大切。

という記述があった。1期生の仲間意識は強く、修了後のメーリングリスト(巻末資料94ページ参照)には2010(平成22)年12月末までの1年5ヶ月の間に、340件の活発な投稿がなされている。

2期生は、講座の開催が秋の終わりから冬になる寒い季節だったことも影響しているのか、体調の悪い人、うつ症状をもつ人が多かった。追跡調査の回答率も低かったが、回答のあった10人は「人との出会いが大きな財産だった」「人に慣れていく

自分を感じた」「1人ではなかった」などと語っている。

3期生は、修了後に情報提供等のこれまでのフォローアップに加え、就労体験カフェ立ち上げのための研修を実施し、希望者が多数参加した。メーリングリストでの情報提供でフォローアップを行っていたそれまでの期とは大きく条件が異なっている。実際に有給のカフェスタッフに4人が採用されたことが、他の期とは大きく異なっている点である。

「引き続きカフェ（の立ち上げ）に参加でき、仕事に無理なく移行できてよかった」という感想が複数あった。変化したこととしては

- ・カフェコーディネーターの方と交流できた。
- ・3ヶ月という期間、同じ(研修)場所へ通うことで家から外へ出られた。
- ・人の中に入っていけるという実感が持てた。
- ・研修に参加している人たちのがんばりを見ていて、私も自分のできることをがんばろうと思った。

などの記述があった。

さらに全体を通しては、

- ・パソコンで書類を作れるようになった。
- ・メイク講座のおかげで自信を持って外に出られるようになった。

といった実利的な変化をあげた人もいれば、

- ・もっと自分を大切にしていいたと知り、少し楽になった

という精神面での気づきや変化をあげた人もいた。

⑦ 講座後に行動したこと、利用したサポート機関について

自由記述にみられる「行動したこと」を列挙した（複数回答あり）。

図表 22 行動したこと

行動	人	備考
ネットで仕事探し	2	
面接	2	うち1人は20回以上不採用
ボランティア活動	2	おもちゃのかえっこバザール、おもちゃ病院協会入会
イベント出品・出店	2	ヨコハマ国際映像祭、地域のアートイベント
通院	2	発達障がい専門病院への通院、心理士・医師への相談
高卒資格認定試験受験	1	

通信制大学入学	1	
派遣会社に登録	1	
求人問合せ、応募	1	

次に自由記述にみられる、利用したサポート機関を多い順にあげた（複数回答あり）。

図表 23 利用したサポート機関

機関名	人	利用した内容
よこはま若者サポートステーション	15	相談、セミナー、ジョブトレーニング、パソコン講座等
ハローワーク（マザーズハローワーク、ヤングハローワークを含む）	9	求職活動、相談、精神障害者むけの就労講座とジョブトレーニング等
職業訓練機関（各種）	7	簿記、喫茶、貿易事務、医療秘書、司書、パソコン等
男女共同参画センター	6	めぐカフェ研修、女性起業相談、セミナー
かながわ若者就職支援センター	2	就職相談、就職塾、1日集中講座
磯子区民活動支援センター ※1	1	地域デビュー講座参加後、WE21ショップやこども科学館でインターン
ハマトリウムカフェ（横浜市委託事業）	1	在宅ワークセミナー
地域作業所	1	職業訓練
磯子区地域生活支援センター ※2	1	生活相談
東京しごとセンター	1	セミナー

※1 区民活動センターは横浜市が各区に整備している市民活動サポートのための施設。

※2 地域生活支援センターは上記 1 と同じく横浜市各区にある、障がいをもつ人のためのサポート拠点。デイケア、食事会、社会福祉士等スタッフによる生活相談等のメニューがある。

⑧ サポート機関の利用についてのまとめ

開講当初から連携してきたよこはま若者サポートステーションの利用がもっとも多い。第2期からはよこはま若者サポートステーションのキャリアカウンセラーに講座の1コマを担当していただいている。当男女共同参画センターにはない支援として、若年者専門のメンタル面も含めた個別相談が受けられることから、利用を勧めている。

かながわ若者就職支援センターも講座の中で紹介している施設である。同施設は神奈川県で、国の機関であるハローワークが併設されており、キャリアカウンセリングから職業紹介まで若者の就職支援を行っている。同施設では、職業訓練の紹介も行っており、2009（平成21）年度、2010（平成22）年度には、緊急人材育成・就職支援基金事業（略称：基金訓練）が多種にわたり行われていた。この訓練は、一定の条件を満たした場合、給付金が受給できる。しかし、基金訓練の情報は当事者が入手しやすいとはいえなかったようである。講座のフォローアップとして行っているメーリングリストで、基金訓練の情報を流すと、複数の人が受講についての相談にかながわ若者就職支援センターに足を運んだ。結果は必ずしも基金訓練受講に至ったケースばかりではない。「あなたよりもっと困っている人がいるからといわれ、今回は入れませんでした。でも自分で動いてみるのが重要だと、行ってみてわかりました」というメールが返ってきたこともあった。こうした一つの行動を促すことができたことは講座の成果である。

自分にはどのサービスが活用でき、どのサポート機関が合っているのか、足を運んで試すことは多くの修了者が行っていた。地域生活支援センターを体調改善のために利用したり、地域作業所を就労訓練のために一定期間通って活用したりする修了者がどの期にもいた。

◎ 今後1年後への希望

自由記述のコメントをその内容から5つの項目に整理して、多い順にあげた。

図表 24 今後1年後への希望

コメントの内容	件数
働き方について <ul style="list-style-type: none"> ・ 週5日フルタイム（できれば正社員）で働きたい、収入を上げていたい、お金をためたい：8 ・ アルバイトをできるようになり、働くことに慣れたい：4 ・ 体調を回復させつつ、週3日ぐらいで働きたい：2 ・ フリーで仕事をしたい：1 	15
資格や勉強について <ul style="list-style-type: none"> ・ （勉強中の）資格を取ってそれを生かした職に就きたい：7 ・ 高校中退しているので高卒認定試験に合格したい：2 ・ （通信制）大学で勉強しながらボランティアや仕事をできるようになりたい：1 ・ できれば専門学校へ行きたい：1 	11
仕事について <ul style="list-style-type: none"> ・ （現在めぐカフェスタッフをされていて）働くことに恐怖がなくなったので、カフェ以外の仕事を始めたい：4 ・ 今の仕事でやれることを精一杯がんばりたい、続けたい：3 ・ （病気休職中の）会社に戻って働きたい：1 ・ （アルバイトが決まったので）まずは週3日から社会復帰し、多くの女性と接し今後の人生のヒントを得たい：1 	9
各種活動について <ul style="list-style-type: none"> ・ 創作活動を再開し、自分のブログを立ち上げ、発表の場としたい：1 ・ インターネットラジオの配信を試みたい：1 ・ ボランティアで知り合った方々と親交を深め、その経験を就業にも生かせるようにつなげていきたい：1 ・ 子どもとかかわるボランティアをしたい：1 ・ 仕事の経験値を上げていつか同じ悩みをもつガールズたちと何かできたらいい：1 	5
その他 <ul style="list-style-type: none"> ・ 体調の回復をしなければ：2 ・ 講座で見聞きしたことを思い出しながら、仕事の面と合わせて精神的な面でもっと成長していきたい：1 ・ 結婚したい：1 	4

⑩ 今後の希望についてのまとめ

現在働いていない人は「アルバイトをできるようにになりたい」、少しでも働いている人は「週5日フルタイムで働き、収入を上げたい」と回答するなど、総じて堅実で具体的な次のイメージを描いている。「アルバイトをしたい」という希望には「ケイタイ代ぐらいは自分で払えるようになりたい」という記述もあった。

「週5日、フルタイムでできれば正社員で働きたい」という希望をもつ人が一番多い。しかし、現実には体調不良でフルタイム就労は難しいことや、雇用の受け皿が少ない現実を認識しており、「希望はそうだが、資格を取ったところで職があるのか不安」という記述もみられる。「働くこと＝週5日働くこと」という社会常識がプレッシャーになっていることがうかがえる。

「(1年後は)働いていたい」という漠然とした、しかし切実さも感じられる回答も複数あった。

回答はさまざまであり、その背景にはこれまでの職歴の有無や現在働いているかどうか、健康状態への不安の強弱など、人によって異なる状況があると思われる。

⑪ 今困っていること

自由記述のコメントを3つの項目に整理して、多い順にあげた。

図表 25 今困っていること

コメントの内容	件数
自分自身のこと <ul style="list-style-type: none"> ・ 不安定な体調(めまい、PMS(月経前症候群)、腰痛、うつ、精神的な病など)：6 ・ 自分の体力不安・スキルと自信のなさ・精神的弱さ・マイナス思考：4 ・ お金がなく、友達づきあいできずに連絡が減る：3 ・ 日々の生活を自己管理していくことが難しい(時間・お金・健康等)：1 ・ パソコンをもっと学びたいが、いいところが見つからない：1 ・ たくさんのやるべきことの優先順位をどうつけていくのか：1 ・ 将来の不安：1 	17
仕事のこと・社会のこと <ul style="list-style-type: none"> ・ アルバイトでは食べられない、派遣は不安定なので社員希望だが、(採用が)決まらなくて生活に困る：3 	10

<ul style="list-style-type: none"> ・ 今は週5日アルバイトをしているが、将来自立までのステップをのりこえていけるか不安：1 ・ 週3日のアルバイトをしているが、フルタイムになるか副収入を得るか悩む：1 ・ 資格を取っても働く場所があるのか不安不明：1 ・ 職場と自宅の往復が苦痛：1 ・ 職場で年上の人が多くて緊張する：1 ・ めぐカフェのアルバイト後、ほかの仕事ができるのかどうか：1 ・ 休職中の会社に自分の障がいについて説明するのか、それで働きやすくなるか、または会社をやめるのか：1 	
<p>家族のこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ (働くことがうまくいかないのに) 家族(祖母)の介護をしろといわれる、家には介護施設に入ってもらい家計の余裕もない：1 ・ 家にお金がない：1 	2

⑫ 「今困っていること」のまとめ

「困っていることは数限りないんですが…(苦笑)」で始まる記述が象徴的である。図表 25 にまとめたように、数多くの「困っていること」についての記述があった。

大別して、困っていることは多い順に「自分自身」「仕事・社会」「家族」の3つに分けられた。自分自身の体調不良や体力気力の問題で困っているという記述がもっとも多い。

家族の問題についてはここではあまり出ていないが、講座の中では多くの参加者が言及していた。たとえば、娘である独身女性が家にいる場合、家族に介護が必要になると真っ先にケア役割を期待されるため、「働きに出ないで面倒をみて」といわれて自分の選択ができない状況に陥りやすい。家族の状況と女性に対するケア役割の期待が、本人の選択肢を限定している。

講座修了半年後に、修了者が多くのことに困っていることをどう考えたらよいだろうか。

講座に参加し始めたときに多くの方は、働きたいけれどもできない自分をどうしたらいいかわからないという漠然とした将来への不安を抱えているように見受けられる。自分の状況について語る言葉を持っていない人がほとんどである。講座に通う中でさまざまな情報を得、体験を見聞きし、人に出会い、自分の現状について見つめることになる。その結果、修了後には自分の問題・課題は何なのかに気づいて言葉を持つようになる。それは後退ではなく、課題の明確化が進んだということにほかな

らない。

課題が明確になって初めて解決に向けて動いていけるものである。スタート地点に立つ、と言い換えてもよい。そのとき、講座で得た多くのサポートについての情報が役に立つはずである。〈表6〉にみられるように、実際に修了者はそれぞれに合ったさまざまなサポート機関を利用していることがわかった。

⑬ 社会のサポートへの要望

自由記述を列挙した。

図表 26 社会全体への要望

記述の内容	件数
具体的な就労体験の機会がもっとあったらと思う	1
子どもへの支援も必要だが、若者への支援ももっとやってほしい	1
中身のあるサポート機関と、理解あるサポーターを増やしてほしい	1
サポートは増えても、仕事が増えないのはどうしたらいいのか	1
サポートの情報がわかりにくい	1
(障がい等への)偏見をやめてほしい	1
働きやすい職場を増やしてほしい	1
この講座のようなサポートが全国的に広がってほしい	1

図表 27 当センターへの要望

記述の内容	件数
割安のパソコン講習会をもっとやってほしい	2
めぐカフェ以外にも安心して働ける就労体験プログラムがあるとよい	2
めぐカフェはもう少し長期の雇用だとよいと思う(ほかで採用された人の意見)	1
在宅ワークについて希望の持てる働き方だと思うので取り上げてほしい	1
センター3箇所での講座と合わせて相談も受けられるようにしてほしい	1
修了後も長く親身に対応してもらえるようによろしく願いたい	1
ガールズとひとくくりは難しいので35-40歳など年齢で区切ってほしい	1

⑭ 要望以外のコメント

- ・ パソコンをていねいに教えてもらえてよかった、その後役立っている (2件)
- ・ 無料でこんなに親切にさせていただいてとても感謝
- ・ 相談室があるのでありがたい
- ・ 同期の仲間と連絡を取り合い、報告しあっている

- ・考え方が変わり、ラクになった
- ・めぐカフェは初の試みとして、とても多くのことを吸収できた
- ・情報提供や、積極的に仕事のチャンスを与えてくれ、本当に感謝
- ・横浜市民以外も受け入れてくれるのがよい

⑮ その他

最後の設問の回答として、ある1期生は書いている。

「私はこちらの講座に参加するまで、私のような社会に出て行くことに失敗した者がまた人と関わるができるような機会は二度とないだろう…とっていました。また、サポートしてくれる施設のことなどもまったく知りませんでした。この講座で若者サポートステーションを教えていただき、サポートステーションで色々な講座に参加して少しずつ友人が増え、今就労(アルバイト)にむけて担当の方と相談をしています。私はまだ仕事には就けていないのですが、1年前に比べてかなり前向きになれたと思っています。講座に参加してよかった! 本当にありがとうございました」。

この修了者は追跡調査時には「未就労」であったが、その後のカフェ研修に参加し、現在はカフェスタッフとして後輩を受け入れる立場になっている。働く姿からは、本来自分がもっていた力を発揮しているように見受けられる。講座は入口であり、そこで得た気づきを就労に結び付けていくには、社会とかがかわる体験が不可欠であり、重要であると思われる。

「パソコン講座をもっと」という声も少なくないが、講座に長く参加するよりは小さな仕事でも活動でも実際にパソコンスキルを使って目的をもって何かを伝える、仕上げる、達成感を得ることの意味は大きい。社会で生きていく出口にむけて、自分を否定されない安心できる環境の中でさまざまな体験のできる場が求められている。

(3) 講師・支援者の意見

「ガールズ講座」および就労体験プログラムを検証する講師・支援者の意見交換会を次のように開催した。

日 時：2011（平成23）年1月6日（木）10:00～12:00

場 所：男女共同参画センター横浜 3階

出席者：

《本講座講師》

大野温子 パソコン講師（NPO法人ITスキルサポートフォーラム代表）

無藤恭代 からだほぐし・心ほぐし講師（整体師）

木村静 呼吸とリラックス、発声講師 および
ツイッター、CM制作等 広報講師

久保彩 アサーティブネス講師（H.I.D 代表）

保坂公美子 履歴書・職務経歴書等キャリア支援講師
（よこはま若者サポートステーション）

内田ふみ子 ライフプラン講師（有限会社ファイナンシャル教育社代表）

《就労体験支援者》

丸橋克美 就労体験カフェコーディネーター

《スポンサー》

内田陽子 日本マイクロソフト(株) 社会貢献事業コーディネーター

《事務局》

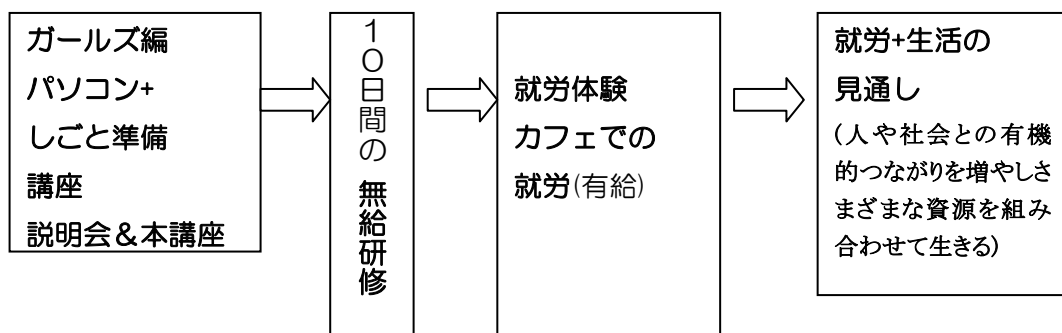
納米恵美子 男女共同参画センター横浜館長

小園弥生 協会本部事業企画課 若年女性のための自立支援講座担当職員

意見交換 次第：

- ・ 事業の経緯と内容説明
- ・ 各担当講師、支援者からの報告および所感
- ・ 対象者と支援プロセス（案）について説明、今後について意見交換

【支援事業のプロセス】



① 各講師の担当部分の内容と所感

席上での発言から、以下に講座の担当部分の内容、大切にしていることおよび所感をまとめた。

出席者と担当	担当講座の内容&大切にしていること	実施しての所感
【講座】		
大野温子 パソコン講師	<ul style="list-style-type: none"> ・テキストは仕事の疑似体験を意識して開発した（旅行会社社員の設定）。 ・（講座全体の導入として）ゆっくりペースで、出入り自由の安心な雰囲気づくりを心掛けている。 ・パソコンを目的に沿って効率よく使えるようになることが大切。 	<ul style="list-style-type: none"> ・受講者の反応がうすいので、担当講師も緊張した。 ・最初はとにかく緊張がしんと伝わるが最終日には微笑み返してくれるようになってほっとした。
無藤恭代 からだほぐし・心ほぐし講師	<ul style="list-style-type: none"> ・からだと心は一体で、からだをほぐすと心もほぐれていく。 ・「頭寒足熱」、頭はクールに足は温かい感覚を体感して、思い出してほしい。それが仕事がかどる状態。 	<ul style="list-style-type: none"> ・若い人がこれほど体を壊しているのは衝撃。 ・からだの左右差が大きく、手足が冷たい、便秘や肩こり、腰痛が多い。 ・呼吸が浅く、気が上がってしまっている＝誰でも頭が混乱する状態。
久保彩 アサーティブネス講師	<ul style="list-style-type: none"> ・「自分も相手も大切にするコミュニケーション」であるアサーティブネスの手前の「大切にすることはどういうことか」を伝えている。 ・同世代として自分自身の体験から話している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・話を聞いて泣いたりする人もいたので、途中休憩してお茶を飲んだりからだをちょっと動かしたりという気分転換もしている。
木村静 呼吸とリラックス、声およびカフェ映像制作・広報講師	<ul style="list-style-type: none"> ・声を使う仕事の経験から、腹式呼吸やリラックスすること、少しずつ長く息をして声を出していくことをやっている。 ・その先にほんとうは「自分の声を出す」ことがあるのだが（そこまでは行きつかない）。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「久しぶりに声を出した」「大声を出した（全然大きくないのに）」などの参加者の感想に驚かされる。 ・のどに力が入っていて、これではのどをいためるだろうと思うことがある。

<p>内田ふみ子</p> <p>ライフプラン講師</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・受講者が置かれている社会の状況を客観視する、雇用や経済をふりかえる中で自分を見つめる。 ・「社会と自分とのつながり」を意識して社会保障や年金制度（支払免除手続き含めて）を情報として伝える。 ・困ったときに使える制度を知っておく、調べられるのは生活技術である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・講座ではシーンとしていたが、終了後に何人かが個別相談に来たことから、こうした情報を必要としていることがわかった。
<p>保坂公美子</p> <p>履歴書・職務経歴書等キャリア支援講師</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・インスタント証明写真でよく写るコツを伝えている。 ・履歴書記入はハードルが高いと感じている人が多い。恐怖感を拭い去り、ていねいに字は太くしっかり書くことを伝えている。 ・履歴書の空白期間、病歴を書くかどうかなど、受講者の多くに共通の疑問に答え、今何ができるか書くように勧めている。 ・無理のない働き方を医者と相談して確認する必要も伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・講座の終盤なのでみなさんの緊張は少しほぐれている。 ・写真の話はみなに共通の関心事なのでやりやすくなる。 ・0.7ミリのボールペンで書く履歴書の実演が好評。 ・学歴や職歴がまちまちなので応募書類の記入指導は、講座より個別対応が向くと思う。
<p>【就労体験】</p>		
<p>丸橋克美</p> <p>就労体験カフェオーナー</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・安心感をもって仕事に踏み出してもらえるように、心身不調だった自分の体験から話したり接したりしている。 ・自ら応募したやる気が働く中で萎えてしまわぬよう、たとえば、「時間がかかっても丁寧である」など1人ひとりの持ち味を見出していくよう、心を砕いている。 ・仕事に限らず社会経験が少ないので就労体験カフェでいろいろ体験してもらいたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・最初は表情がない、声が出ない、反応がないから言ったことを理解しているかわからない、字が小さい細いといった共通の特徴に圧倒された。 ・時間を区切って作業することが難しい面があるようで、とても時間がかかった。 ・何ヶ月かで彼女たちがとても成長したことを、次の研修生受け入れで実感している。 ・お菓子作りなど共通の話題で楽しみも感じる。

② 講座後の就労等さまざまな体験の受け入れについて

複数の講師から、講座修了後も講師自身の仕事に関連してさまざまな就労体験など

の機会を自発的に提供し、サポートしてくださっていることが語られた。どのような機会が提供されていて、講師自身がその就労体験のプロセスや結果についてどう感じているかを発言からまとめた。

アサーティブネスの講師が自身の事業体とネットワーク団体でケース1、3、4の3件を受け入れている。ケース2はパソコン指導のNPO法人での受け入れ、ケース5は呼吸法等の講師が活動する市民グループでの受け入れ、ケース6はFPの講師によるフォローアップの事例である。

《講師による講座修了後のさまざまな体験の受入れ》

ケース 1	対象者： 講師が見込んだ修了者1名 体験内容：事務アシスタントとして1年間の在宅ワークを経て、週4日・1日4時間勤務のパートに採用。 所 感： 在宅での仕事をやりとりするのは難しかった。きめ細かいサポートが必要。
ケース 2	対象者： パソコン検定の資格をもつ修了者1名 体験内容：他のパソコン講座の見学や講師見習い（無給）を経て、次のガールズパソコン講座（10日間）のサブ講師に起用（有給）。 所 感： 体調がよくないとき家族が車で送ってくれるなどの支援があつてやり通すことができた。そのことから、まわりの人や家族の協力があること、本人がそれを理解することも大切。
ケース 3	対象者： アサーティブネス講座での気づきを担当者に熱く語った修了者2名 体験内容：感想レポートをボランティアで書いてもらい、講師ブログに掲載（その後講師と面談）。
ケース 4	対象者： ケース3でレポートを書いた修了者1名 体験内容：起業家ネットワークのイベント受付アルバイト（単発）。 所 感： 支払った時給の金額について女性起業家の中で意見が分かれた。
ケース 5	対象者： ITスキルが高く、就労研修で意欲的であった修了者1名 体験内容：市民メディア講座（動画撮影やインタビュー）の講師アシスタントに起用し、会場のセッティングや参加者のフォローを担当（数回）。 所 感： アルバイトは初めてと言いながらきちんと指示通り、さらに先を見て動いてくれた。
ケース 6	対象者： FP有資格者 体験内容：講師に進路相談をしたことを契機に、FPの勉強会に定期的

	<p>に参加するようになった。宿題は「名刺を作ってくること」であった。</p> <p>所 感： 会社員や主婦など多様な立場のF Pから話を聞くのが、今後の仕事の参考になるのではないか。</p>
--	--

※ケース3およびケース6は「無給の社会参加の機会の提供」であるが、それ以外のケースはすべて「有給の就労機会の提供」であった。

③ 自由討論より

気になること、大切だと思うこと、また今後の支援のあり方について自由に話してもらった中で、自立支援プログラムについて考えるヒントになるトピックを拾った。トピックは以下の5つである。

- ア ソーシャルスキルについて
- イ 生活スキルについて
- ウ 体調不良や障がいについて
- エ 居場所について
- オ 支援者のあり方について

ア ソーシャルスキルについて

時間を守る、TPOに合った服装をする、職場では報告・連絡をするといった社会生活上のルールを守ることや、規則正しい生活を送ることが就労体験カフェではできているのかという問いかけがあり、それに対して次のようなコメントがあった。

《講師からのコメント》

- ・ 社会で働くうえで必要とされることが身につけていないだけでなく、それがどのようなことなのかについての理解が及ばない、あるいは概念として持ちえていないという人に、欠落部分をバックアップしていく何かが必要。社会のルールに乗りきれない人をどうフォローしていくのが若者支援現場の課題である。
- ・ 何をもち「ソーシャルスキルがある」と言えるのだろうか。精神的に病気があるというのはどこからなのか。基本的な問題は、想像力があるかどうか、遅刻したら困る人がいるとか、コミュニケーションによって解決できることもあるのではないか。

当センターとしては、まず入口としての講座では安心できる場、あたたかく受け入れてくれる場を体験してもらうことに主眼を置いている。講座の段階では、ていねいに迎えらるべき受講者と認識しており、遅刻や欠席も結果として受容

している。

次に就労体験研修（無給）の段階になると、特にソーシャルスキルのトレーニングとして、「遅刻しない」「返事をする・声を出す」「報告・連絡をする」などが必要と考えている。受講者にとっては無料でトレーニングを受ける機会であるとも言える。

さらに進んで次の就労体験の段階では有給となり、給料を受け取るのであるから、「時間を守れない（遅刻）」「返事がない・声が出ない」ことは仕事（カフェの運営）に支障をきたすことである。支障をきたさないように、「時間を守る」等のことができるようになっていないと想定されなければならない。研修で「シフトの開始時間には現場にいる」というルールを提示し、有給スタッフとなるときには基本的なソーシャルスキルをクリアした人を採用するものである。

イ 生活スキルについて

生きていくのに必要な、使える技術としてのパソコンスキルを習得すること、制度を知ること、食生活を整えることなどが大切であると、どの講師も述べている。こうした事柄は机上の知識ではなく、社会と自分がつながるための生活技術の獲得なのだという視点が重要である。

《講師からのコメント》

- ・ 自分が使える社会の資源は何か、相談先、また自分と社会はつながっていて守られる制度もあるという情報やものの見方を、学生も卒業後も、若い世代が獲得する場がない。教わらない。困ったときにこういう制度が使えると知っておく、調べられるというのは生活技術としてたいへん重要。
- ・ パソコンスキルも知識として持ってはいても整理されていないし、効率的でない。（生活や仕事の道具としてパソコンを使えるようになるということが）このパソコン講座の意義であるし、そういう感想ももらっている。
- ・ 彼女たちの食生活はどうなっているのか疑問。インスタント食品やコンビニ弁当でないものを食べてからだを整えるという視点が大切。

ウ 心身の不調や障がいについて

服薬中の人とそうでない人が混在している状況での講座実施に問題はないだろうかとの指摘があった。これについて、当センターとしては次のように考えている。

受講者は心身が不調で、服薬中の人が多い現状である。講座の段階では、健康レベルに差異がある受講者の混在は、さほど問題にならない。しかし、就労体験の段階になると心身の不調な人が混在するのは運営上支障が生じる。

また、緊張が強いことなどは安心できれば緩和され改善されていくが、精神的な病気や発達障がいなどは、トレーニングで改善可能なものではない。症状や障がいに応じて、できることをやってもらう個別的な対応がどうしても必要となるが、男女共同参画センターはそのような専門性やスキル、マンパワーを備えている福祉施設とは異なる。無給の研修までの段階で、ある程度のソーシャルスキルを身につけた人が就労体験で有給スタッフになるという流れを作り、整理してきたところである。

就労体験カフェを運営する中で明確になったことは、当センターの資源および行える支援の範囲には限界があるということであった。

いっぽう、障がいをもつ人を対象とした就労支援センターは横浜市内各区に整備されてきており、福祉作業所も各地にある。横浜市には発達障害者支援センターもある。これらの支援の情報提供も講座のなかで行い、修了者が自分に合った支援を受けるように選択していけることが望ましい。実際、追跡調査結果をみても修了者は地域のさまざまな社会資源を利用していることがわかった。

エ 居場所について

学校でも会社でもない、利害関係のない“場”を作ることができることが男女共同参画センターの利点である。「人も社会もこわいもの、信じられないもの、とずっと思っていた」ということは、講座の終盤で多くの受講者が語っている。第1期講座の最終日に、ある受講者が「ここでは私は追い詰められなくて、とてもよかった」といい、明るくすっきりした表情で帰っていったことは象徴的なできごとであった。

いろいろな場所で追い詰められ、深いマイナスから出発せざるをえないのが現状であるなら、そのような人たちにとって“安心な場をつくる”ということはマイナスからゼロ地点に立つ、出発できる地面をつくることに他ならない。人は安心が得られてこそ次の行動に移ることができ、社会に参加していくことができる。一步を踏み出すプロセスに自ら入っていく中で「支えあい、変化していける」という感触を得られる場をつくるのが、当センターの役割である。安心な場から、社会へ向けて一步を踏み出すプロセスへ入っていけるよう後押しする支援としては、グループ・ダイナミクスのメリットを生かした支援が不可分であろう（グループ・ダイナクスについては33ページ参照）。

《講師からのコメント》

- ・（若者サポートステーションという）相談機関では場を作ることにはできないので、ガールズの講座や就労体験カフェは孤立している人にとって“自分の居場所がある、ここにおいてOKと認められる場がある”という意味で大きな存在

- ・ 港の中に安全な場をまず確保して、だんだん外海に出ていく、という言い方をすると就労体験カフェは港の出口に近いところ。アルバイトやアシスタントとして講師のみなさんが受け入れている人は一歩外で揺れながらがんばっているところ

オ 支援者のあり方について

座談会の中では明確なトピックではなかったが、支援者のチームをどう作るかということと関連して、支援者としてのスタンス、あり方について取り上げておきたい。

この講座を開始するにあたり、どのような要素をどのような順番で構成するかということと同じぐらい、講師の選定は重要だった。これまでの当センターの再就職支援講座とは目的と対象者が異なるため、新しい支援チームをつくらなければならなかった。講師としてのスキルはもちろん必要であるが、専門性や実績に加えて、支配的・指示的でない人とのかかわり方や対象者を理解しようとする姿勢が重要となる。講座修了後も次のステップに向けて修了者に社会に参画する機会を提供してくれるなど、このような姿勢をもつ講師の方々だからこそ行われていることであろう。

講師の年代、立場が多様であったことも効果的であった。受講者と同年代で若くて、しかもなんらかの困難を抱えた当事者性をもつ講師も、受講者の母親世代の講師、さまざまな年代の方に講師としてかかわってもらったことで、支援者の共通性と多様性が結果的に効を奏している。受講者の立場からは、「お母さん」がいたり、「お姉さん」がいたり、同世代の「友人」のような支援者がいたり、といった具合である。また、それぞれの方の立場も起業家であったり若者支援機関のスタッフであったり、フリーで働く人であったり、NPOのスタッフであったりという多様性も良い結果をもたらしている。社会にはさまざまな立場や働き方があり、支援者自身もまたさまざまな体験をしていることが伝わっていると思われる。

《講師からのコメント》

- ・ 私たちはお母さん世代なので、ゆっくりとしたペースで、いつ帰ってきても大丈夫という雰囲気づくりを心掛けている。
- ・ 私は彼女たちに年齢が近いこともあり、なぜアサーティブが大切だと思うに至ったか、自分自身の困難の多かった体験を話している。私自身、高卒で、うつもわずらって、彼女たちと同じところから這い上がってきたので彼女たちには力があると思っている。

- ・ 私は母子家庭で育って、社会がこわかった。メディアの世界をめざすようになってその夢があるからこそフリー（ター）でいることを肯定でき、今の自分が始まっている。だから受講者には親近感があり、友だちが増えていくような感じがかかっている。
- ・ 1年前に離婚して、情報がないのがどんなにたいへんか痛感した。通院していて病気であるというレッテルも貼られる。そのころ、再就職講座で出会った友だちが情報やアドバイスをくれて助かった。ガールズ講座受講者の感想はどれも自分のことのような。弱者という実感と、一方で社会には守ってくれる制度も人の支えもあるという実感と両方がある。

4 地域の社会資源について

横浜市では子ども・若者への支援を所管することも青少年局が若者就労支援の領域において早くから施策を策定し、2006（平成 18）年からは若者サポートステーション等の事業を NPO 法人に委託する形で展開してきている。また、2010（平成 22）年には子ども・若者育成支援推進法に基づいて「子ども・若者支援協議会」が設置され、施策検討と提言機能を担っている。支援事業の成果を伝える報告会も行われている。

しかし、支援に携わる現場スタッフ同士でケース検討を行う公的な枠組みがないのは支援態勢として不十分である。準拠法、所管局、得意とする専門領域、対象者が異なる現場において、成り立ちの異なるそれぞれの支援機関の専門性と役割が明確になっており、各機関単独での支援は成り立たず、連携が不可欠であるのが現状だ。照会方法、照会の際のフォーマット、個人情報扱いに関する共通のルールが構築され、共有化されていることが望ましい。当男女共同参画センター横浜ではよこはま若者サポートステーションと連携し、必要に応じてケース検討を含めた会議を開催しはじめたところであり、今後適切なカンファレンスの場をもうけていきたいと考えている。

次に、支援サービスを利用する本人を真ん中に置き、各支援機関をまわりに置いたエコマップ（通常、福祉サービスにおいて支援を要する者を中心として、本人の抱える問題の解決に関わると考えられる関係機関を記載したもの）を描いてみる。ここで掲げた支援機関は横浜市の場合である。

図表 27：支援機関エコマップ



地域にはさまざまな支援機関が存在する。マップには健康課題の解決に役立つ機関を下のほうに、社会や人とのつながりを作るのに役立つ機関を中ほどに、就労課題の解決に役立つ機関を上の方に配置した。